

## 三度目のsvabhāvapratibandha

福田洋一

日本印度学仏教学会第63回学術大会

パネル「討論 svabhāvapratibandha—ダルマキールティ論理学の根本問題

2012/7/1

1. 本発表では、svabhāvapratibandhaという用語の意味を確定したい。

この語の意味するところをtādātmyaとtadutpattiの解釈で代用することはできない。この二つの関係に共通の特徴を表すものだからである。もちろん、なぜtādātmyaが成立するときに、svabhāvapratibandhaが成立するのも考えるべきテーマではあるが、その問題はtādātmyaの解釈の問題になり、svabhāvapratibandhaの意味の理解には直接寄与しない。

2. svabhāvaの意味も、問わない。この語の意味の中心はpratibandhaにある。svabhāvaの意味の解釈如何にかかわらず、pratibandhaの意味を明らかにすることが最も重要である。

なぜならば、ダルマキールティはsvabhāvaを欠いたpraitbandhaやさらにはpratibaddhaという過去分詞形でも同じ思想を語っているからである。svabhāvaがあることでpratibandhaの意味に付加される要素は少ない。

3. 「論理的」という修飾語は、ある対象が別の何かを推知せしめるという意味でのみ使用したい。これを「論理的指示関係」と名付ける。あるものが存在するときに別のものが存在するというanvaya、あるいはその逆のvyatirekaは、論理的指示関係を成立させるための対象の側での関係である。論理とは、推理という認識の問題である。このように考えることで、vyāptiとsvabhāvapratibandhaが、両方とも、論理的指示関係を保証する、対象の側での関係として対比されるようになる。

4. svabhāvapratibandha、avinābhāva(niyama)、avyabhicāraなどの意味上の主語はいずれも論証因であり、その意味上の補語になるのは所証である。言い換えれば、これらは論証因が所証に対して持つ関係である。

(1) svabhāvapratibandhe hi saty artho 'rthaṃ na vyabhicarati / (PVSV, 2.19-20)

(2) svabhāvapratibandhe hi saty artho arthaṃ gamayet / (NB, 2.19)

sa ca pratibandhaḥ sādhye 'rthe liṅgasya / (NB, 2.21)

(3) kāryasya kāraṇenāvinābhāvas tadutpatteḥ / svabhāva idānīm katham avinābhāvaḥ /

svabhāve apy avinābhāvo bhāvamātrānurodhini / (PV I. k.39ab)

yo hi bhāvamātrānurodhī svabhāvas tatrāvinābhāvo bhāvasyeṣyate / (PVSV, 24.7-11)

5. 「論証因は、所証に対してsvabhāvapraitbandhaしているが故に、所証を理解せしめることができる」というのが、ダルマキールティにとって最も根本的な命題である。

6. ダルマキールティはこの根本命題を説明するために、逆のことを次のように述べる。「それにpratibaddhaしていないものには、それに対するavyabhicāraの必然性はない」。

(4) tadapratibaddhasya tadavyabhicāranīyamābhāvāt / (NB, 2.20)

これは一種のレトリックである。5の命題と同じことを否定的な表現で述べているのである。「それ」というのは所証であり、pratibaddhaしていないものとは、論証因たり得ないものである。肯定的に言い直せば、pratibaddhaしているものである論証因は、所証に対してavyabhicāraの必然性があるということになる。

論証因は、pratibandhaの意味上の主語であり、またpratibaddhaしているものと同格でもある。pratibaddhaしている先は所証である。

7. もう一つ、基本的な命題。「論証因の所証に対するpratibandhaは、論証因がvastutas tādātmyaであるが故に、またtadutpattiであるが故に、成り立つ。」

(5) sa ca pratibandhaḥ sādhye arthe liṅgasya / (NB, 2.21)  
vastutas tādātmyāt tadutpatteś ca / (NB, 2.22)

(6) svabhāvapratibandhe hi saty artho 'rthaṃ na vyabharati / sa ca tadātmatvāt / ... / kāryasya api svabhāvapratibandhaḥ / tatsvabhāvasya (=kāryasya) tadutpatter iti / (PVSV, 2.19-3.4)

これは「論証因は、vastutas tādātmya / tadutpattiしているが故に、所証に対して(svabhāva)pratibandhaがある。」と言い換えられる。

8. ダルマキールティはこの命題も、肯定を否定の表現に入れ替えて擬似的な理由句にしている。

(7) atatsvabhāvasya atadutpatteś ca tatrāpratibaddhasvabhāvatvāt / (NB, 2.23)  
(8) apratibaddhasvabhāvasyāvinābhāvanīyamābhāvāt / (PVSV, 8.12-13)

「なぜならば、tatsvabhāvaでないもの、tadutpattiでないものには、それに対してpratibaddhasvabhāvatvaはないからである。」否定的な表現ではあるが、「それ」は所証であり、「tatsvabhāvaであるもの」あるいは「tadutpattiであるもの」は論証因と同格であり、それがpratibaddhasvabhāvatvaの意味上の主語になる。(7)と(8)とを肯定的表現に直して連結して矢印で表せば、

tādātmya / tadutpatti → pratibaddhasvabhāvatva = svabhāvapratibandha → avyabhicāranīyama

9. このpratibaddhasvabhāvatvaは、ダルマキールティがsvabhāvapratibandhaを言い換えたものと考えるのは自然である。それゆえ、svabhāvapratibandhaのsvabhāvaとpratibaddhasvabhāvatvaのsvabhāvaは同じものを指し、pratibandhaはpratibaddhatvaを一般名詞化したものと考えることができる。

pratibaddhasvabhāvaは、「pratibaddhaしたsvabhāvaを有する論証因」とBahuvrīhiコンパウンドとして解釈すべきものであろう。svabhāvaは論証因のsvabhāva以外にはないであろう。ただし、そのsvabhāvaに特に大きな意味があるわけではない。所証にpratibaddhaしている論証因のみが、所証に対してavyabhicāraである、というときの「pratibaddhaしている」が「pratibaddhaしているsvabhāvaを有する」と敷衍されたにすぎないからである。

10. ダルマキールティは、古いvyāptiとsvabhāvapratibandhaを、次のように関係付ける。vyāptiの否定的な形態であるvyatireka、すなわちvipakṣaに論証因が存在しないことは、単に知覚されないことでは成立せず、必ずsvabhāvapratibandhaを認めなければならない。これは、adarśanamātraによってvyatirekaが成立するとの説に対する批判である。

(9) tasmān nāntarīyakam eva kāryaṃ kāraṇam anumāpayati / tatpratibandhāt / nānyad vipakṣe adarśane 'pi / sarvadarśino hi darśanavyāvṛtīḥ sarvatrābhāvaṃ gamayet / kvacit tathā dr̥ṣṭānām api deśakālasamskārabhedenānyathadarśanād / (PVSV, 10.5-8)

དེ་ལྟར་མཐོང་ན་མི་འབྱུང་བའི་འབྲས་བུ་ལོ་ནས་རྒྱ་རྗེས་སུ་དཔོག་པར་བྱེད་དོ། །དེ་ལ་རག་ལས་པ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་ལོ། །གཞན་ནི་མི་མཐུན་པའི་ཕྱོགས་ལ་མ་མཐོང་བ་ཡང་མ་ཡིན་དོ། །ཐམས་ཅད་གཟིགས་པའི་གཟིགས་པ་ལོག་པས་ནི། ཐམས་ཅད་ན་མེད་པ་གོ་བར་བྱེད་དོ། །ལ་ལ་ན་དེ་ལྟར་མཐོང་བ་རྣམས་ཀྱང་དུས་དང་འདུ་བའི་ཁྱད་པར་ལས་གཞན་དུ་སྒྲུབ་པའི་ཕྱིར་ (266a6-7)

「したがって、nāntarīyakaな結果のみが原因を推知させる。なぜならば、〔そのような結果は〕それ（原因）にpratibandhaしているからである。vipakṣaにおいて経験されないとしても、そうでないもの（nāntarīyakaな結果でないもの）が〔原因を推知させることは〕ない。というのも、一切を経験するものにとって〔vipakṣaにおける〕経験が否定された〔ならば、そのこと〕は、〔vipakṣa〕すべてにおいて〔そのものが〕存在しないことを理解させるであろう。〔しかし、一切智者でないわれわれにとっては〕あるところで、ある仕方では経験されたとしても、それらは場所、時間、原因の違いによって別様に経験されるからである。」

(10) anupalambhāt tu kvacid abhāvasiddhāv apy apratibaddhasya tadabhāve sarvatrābhāvāsiddheḥ / saṃśayaḍ avyatiṅko vyabhicārah śeṣavataḥ / (PVSV, 12.23-25)

མི་དམིགས་པའི་སྐོར་ནས་ནི་འགའ་ཞིག་ལ་མེད་པ་གྲུབ་དུ་བྱེན་ཀྱང་འབྲེལ་པ་མེད་པ་ནི་དེ་མེད་ཀྱང་ཐམས་ཅད་ལ་མེད་པ་མི་གྲུབ་པས། ཐེ་ཚོམ་ཟ་བའི་ཕྱིར་ཕྱོགས་མེད་པ་ནི་ལྷག་མ་དང་ལྷན་པའི་འཁྲུལ་པ་ཡིན་དོ། ། (267b4-5)

「知覚されないことによって、あるところに存在しないことが成立したとしても、〔所証に〕pratibaddhaしていない〔論証因〕は、その〔所証が〕存在しない〔vipakṣa〕全てにおいて〔論証因が〕存在しないということは成立しない。それゆえ、疑惑があるので、śeṣavatな〔論証因〕は vyatiṅkaが〔成立〕せず、〔所証に対して〕avyabhicāraである。」

(11) tasmād ekanivṛtīyānyanivṛttim icchatā tayoh kaścit svabhāvapratiḅandho 'py eṣṭavyaḥ / anyathā 'gamako hetuḥ syāt / (PVSV, 10.23-25)

དེའི་ཕྱིར་གཅིག་ལོག་པས་གཞན་ཕྱོགས་པར་འདོད་པས་ནི་དེ་གཉིས་རང་བཞིན་འབྲེལ་པ་འགའ་ཞིག་ཀྱང་འདོད་པར་བྱ་དགོས་སོ། །དེ་ལྟར་མི་མཐུན་གཏན་ཚིགས་གོ་བར་བྱེད་པ་མ་ཡིན་པར་འགྲུབ་དོ། ། (266b5-6)

「それ故、ekānivrītyānyanivrīttiを主張したいものは、その二つの間に何らかのsvabhāvapratiḅandhaがあることも主張しなければならない。もしそうでないならば、論証因は〔所証を〕理解させるものとはならないであろう。」

(12) tāv eva hi nivartamānau svapratibaddhaṃ nivartayata iti kasyacid arthasya pratiḅedham api sādhayitukāmena hetor vyāpakasya vā svabhāvasya nivrīttir hetutvena ākhyeyā / apratibandhe hi katham ekasya nivrīttir anyasya nivrīttim sādhayet / (PVSV, 19.25-20.2)

དེ་དག་ལོ་ན་ཕྱོགས་ན་རང་གི་འབྲེལ་པ་སྐྱོག་པར་བྱེད་པས་དེའི་ཕྱིར་དོན་གཞན་འགའ་ཞིག་དགག་པ་ཡང་སྐྱབ་པར་འདོད་པས། རྒྱུ་འཕྲོད་བཞིན་ཁྱབ་པར་བྱེད་པ་ཕྱོགས་པའི་གཏན་ཚིགས་ཉིད་དུ་བརྗོད་པར་བྱའོ། །མ་འབྲེལ་ན་ནི་ཇི་ལྟར་གཅིག་ལོག་པས་གཞན་ཕྱོགས་སྐྱབ་པར་བྱེད།

(271b2-3)

「それら〔原因あるいはsvabhāva〕だけが、〔それらが〕消滅するときに、自らにpratibaddhaしたものを消滅させる。それゆえ、何らかの対象（論証因）の〔vipakṣaにおける〕否定をも論証しようとするものは、原因あるいは能遍充するsvabhāvaの消滅を論証因として述べるべきである。なぜならば、pratibandhaがない場合に、どうしてあるものの消滅が他のものの消滅を論証することができようか。」

(13) kāryakāraṇabhāvād vā svabhāvād vā niyāmakāt / avinābhāvanīyamo 'darśanān na na darśanāt // (PV I, k.31)

རྒྱུ་དང་འབྲས་བུའི་དངོས་པོ་འཕ། །རང་བཞིན་ངེས་པར་འབྱེད་པ་ལས།

མེད་ན་མི་འབྱུང་ངེས་པ་སྟེ། །མ་མཐོང་ལས་མིན་མཐོང་ལས་མིན། ། (271b7)

すなわち

svabhāvapratibandha → ekanivṛtṭyānyanivṛtṭi → avyabhicāra / avinābhāvanīyama

11. vyāptiにおけるvyatirekaは、「sādhyaのないところには、hetuは決して存在しない」という関係であり、locativeで表現される。しかし、ダルマキールティがここで主張しているのは、「あるものの消滅によって他のものが消滅する」というinstrumentalによって表現される関係である。このlocativeからinststumentalへの転換の意味は非常に大きい。

所証が存在しない全ての場合に論証因が存在しないことを確認することは、一切智者でない我々にとっては不可能である。それに対して、あるものが消滅することによって、他のものを消滅させるような関係を確認することは我々にも可能である。そして、そのような関係は、svabhāvapratibandhaがあるときにのみ成立する。あるいは、所証は、みずからpratibaddhaしているもののみを消滅させることができる。そのとき、所証が存在しないところに論証因がないことを経験に問い合わせる必要はない。なぜならば、原因がなければ結果はありえないし、svabhāvaがなければそのものも存在し得ないからである。

(14) svaṃ ca svabhāvaṃ parityajya kathaṃ bhāvo bhavet / (PVSV, 17.1-2)

(15) kāraṇaṃ nivartamānaṃ kāryaṃ nivartayati / anyathā tat tasya kāryaṃ eva na syāt / (PVSV, 17.5-6)

12. しかし、pratibaddhaしているというのは、どのような意味かは、以上の考察からは導き出せない。これを「本質的な結合関係があるとき」と訳しても意味は通じてしまう。そこでpratibaddhaしていることの意味自体を探究しなければならない。

まず、この語に関してMahāvyutpatti (『新訂翻訳名義大集』東洋文庫, 1989) の対応チベット語を調べてみると興味深いことに気付く。Mahāvyutpattiでは、pratibandhaに対応するチベット語訳 (MV 6483) には ཕྱིས་འཇིག་བཟུང་བཞག་གསུངས་པ་མཚན་གྱི་དུང་པ་ と、「消滅させる、妨げる、障碍をなす」という意味しか載せられていない。一方、pratibaddhaについては (MV 6481) རྒྱུ་ལྷན་པའམ་འབྲེལ་བའམ་བཞག་གསུངས་པ་ ལྟར་པ་ と、まず「依存する」という意味が挙げられたうえで、「結び付く」「障害となる」という意味が付け加えられる。

これだけでは、単に三つの意味が並列されているだけで、頻度や重要度は分からないが、『俱舍論』におけるpratibaddhaの用例を検討すると、そのほとんどがrag lus pa「依存する」と訳され、またコンテキスト上もその意味で理解できることが分かる。玄奘訳では、必ずしも訳語は一定しないが、「繫属」あるいは「依る」あるいは「属する」と訳される。玄奘もほぼ「依存する」という意味で理解していたと思われる。pratibandhaはMahāvyutpatti同様、障碍をなすものという意味でしか使われていない。

AKBh, 70.23, Ku 76a7: Chap.2, 国訳25, p.214; 桜部健『俱舍論の研究』法蔵館, 1969, p.320

icchāmātrapratibaddho hi teṣāṃ sarvagūṇasampatsaṃmukhībhāvaḥ /

དེ་དག་གི་ཡོན་ཏན་འབྱོར་བ་མཐོན་སུམ་དུ་འབྱུར་བ་ཐམས་ཅད་ནི་བཞེད་པ་ཙམ་ལ་རྒྱུ་ལྷན་པ་ཡིན་པས་

「かれら〔諸仏〕には、すべての徳の円満が、ただ〔それを〕欲するだけで、その場に現れる。」  
暫起欲樂，現在前時，一切圓德，隨樂而起故。

AKBh, 99.13, Ku 100a5: Chap.2, 国訳25, p. 311; 『俱舍論の研究』 p.395

yasya yatpratibaddha utpādaḥ sa tasyānantaram utpadyate /

གང་ཞིག་གང་ལ་རྟེན་ལྡན་ཏེ་སྐྱེ་བ་དེ་ནི་དེའི་མཇུག་ཐོག་སྐྱེ་སྐྱེ།

「ある〔法〕の生起がある〔法〕に従属している時は〔等無間縁は無くとも〕前者は後者の無間に生起する。」

若此法生，繫屬彼法，要彼無間，此乃得生。(如芽等生，要藉種等。)

若し此の法が生ずるときには、彼の法に繫属するをもて、要らず彼れの無間に此れが乃ち生ずることを得ること、(芽等の生ずるは要らず種等に藉るが如し)。

AKBh, 109.1-2, Ku 107b5-6: Chap.2, 国訳25, p.335; 『俱舍論の研究』 p.416

tatra pañcavidhamanaskārānantaram āryamārgasammukhībhāvo 'nyatropapattipratilambhikebhyah /

prayogapratibaddhatvāt /

དེ་ལ་སྐྱེས་ནས་ཐོབ་པ་དག་མ་གཏོགས་པ་ཡིད་ལ་བྱེད་པ་རྣམ་པ་ལྡེའི་མཇུག་ཐོག་སྐྱེ་འཕགས་པའི་ལམ་མངོན་དུ་འགྱུར་ཏེ། ལྷོར་བ་ལ་རྟེན་ལྡན་པའི་སྐྱེར་རོ། །

「これ〔ら三界八種の作意〕の中で五種の作意の無間に聖道の現起がある。〔三界の〕生得の〔作意〕を除くのである。〔聖道は〕加行と結び付いているからである。」

此中五種，作意無間，聖道現前。除生所得聖道。繫屬加行心故。

AKBh, 156.6-9, Ku 143a1-2: Chap.3, 国訳26上, p.460ページ; 山口益, 舟橋一哉 『俱舍論の原典解明：世間品』 法蔵館, 1955, p.352

yadā cāsyāśrayo vipariṇantam ārabhate tadāvaśyam asya tadāśrayapratibaddhaṃ cittaṃ saṃmukhībhūya paścāt pracyavet nānyathā /

གང་གི་ཚེ་དེའི་ལུས་ཡོངས་སུ་འཇིག་པར་རྩོམ་པ་དེའི་ཚེ་ཡང་དེ་ལས་གཏོན་མི་ཟ་བར་དེའི་ལུས་དང་འབྲེལ་པའི་སེམས་མངོན་དུ་གྱུར་ནས་སྐྱེས་འཇོམ་པར་འགྱུར་གྱི་གཞན་དུ་ནི་མ་ཡིན་ལོ། །

「またもし依身が、変壊し始めるならば、その時は、決定して此の〔補特伽羅〕に、彼の依身に随属せる心が現前し己りて、然る後に命終するであらう。」

若所依身將欲變壞。必定還起屬所依心。然後命終。更無餘理。

AKBh, 421.3, Khu 122b5: Chap.7, 国訳26下, p.1090; 桜部建・小谷信千代・本庄良文 『俱舍論の原典研究：智品・定品』 大蔵出版, 2004, p.163.

icchāmātrapratibaddhaḥ sarvaguṇasampatsammukhībhāvaḥ.

དེ་དག་གི་ཡོན་ཏན་འགྱུར་པ་ཐམས་ཅད་མངོན་དུ་འགྱུར་བ་ནི་བཞེད་པ་ཙམ་ལ་རྟེན་ལྡན་པའོ། །

「〔仏の〕徳性の円満のすべてはただ〔仏自身の〕意欲に依って（かなわち仏が欲しさえすれば）現前する。」

諸佛功德・・・隨欲能引現前。

13. 『俱舍論』と同様の用例はダルマキールティにも見られる。

(16) sarvaś cāyaṃ svalakṣaṇānām eva darśanāhitavāsanākṛto viplava iti tatpratibaddhajanmanām vikalpānām atatpratibhāsitive 'pi vastuny avisamvādo (PVSV, 43.2-4)

འདི་ཐམས་ཅད་རང་གི་མཚན་ཉིད་དག་ལོན་མཐོང་བས་གཞག་པའི་བག་ཆགས་ཀྱིས་བྱས་པའི་བསྐྱེད་པ་ཡིན་པ་ལས་དེ་དང་འབྲེལ་བ་ལས་སྐྱེ་བའི་རྣམ་པར་རྟོག་པ་རྣམས་ནི་དེ་དེ་སྣང་བ་ཉིད་མ་ཡིན་ཡང་དངོས་པོ་ལ་མི་བསྐྱེ་སྐྱེ། (285a2-3)

「この〔普遍あるいは同一基体の言語表現の〕全ては、自相のみを経験したことで置かれた習気によって作り出された迷乱である。それゆえ、それ（自相）にpratibaddhaして生起する分別知は、それ（自相）として顕現しないけれども、実在に対して欺くことはない。」

(17) na hi śabdā yathābhāvaṃ vartante yatas tebhyo 'rthaprakṛtir niścīyeta / te hi vaktur vivakṣāvṛttaya iti tannāntarīyakās tām eva gamayeyuḥ / na ca puruṣecchāḥ sarvā yathārthabhāvinyāḥ / na ca tadapratibaddhasvabhāvo bhāvo 'nyam gamayati / (PVSV, 107.22-25)

སྐྱེན་དངོས་པོ་ཇི་ལྟ་བུ་བཞིན་དུ་འཇུག་པ་མ་ཡིན་ཏེ། གང་གི་ཕྱིར་དེ་དག་ལས་དོན་གྱི་རང་བཞིན་ངེས་པར་འགྲུར་ན། དེ་དག་ནི་སྐྱེན་བ་པོ་བཟོད་པར་འདོད་པ་ལ་རག་ལུས་པས་འཇུག་པ་ཅན་དག་ཡིན་པའི་ཕྱིར། དེ་མེད་ན་མི་འབྱུང་བ་ཡིན་པས་དེ་ཉིད་གྱིས་གོ་བར་བྱེད་པ་ཡིན་པར་འགྲུར་རོ། །  
སྐྱེས་བུའི་འདོད་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱང་དོན་ཇི་ལྟ་བུ་བཞིན་དུ་འགྲུར་བ་ཅན་མ་ཡིན་ལ། དེ་ལ་རག་ལུས་པ་མེད་པའི་རང་བཞིན་ཅན་གྱི་དངོས་པོ་ནི་གཞན་གོ་བར་བྱེད་པ་མ་ཡིན་རོ། ། (322a1-3)

「語は実在の通りに生じるものではない。なぜならば、〔実在の通りに生じるならば、〕それら〔の語〕に基づいて、〔実在する〕対象の本性が確定されることになってしまうであろうからである。

〔しかし〕それら〔の語〕は話者の意図〔に基づいて〕生じるものであるので、それ（話者の意図）なしにはあり得ない〔語〕は、それ（話者の意図）のみを理解させるであろう。人の意欲はすべて、〔実在する〕対象に従って生じるものではない。そして本性がその〔実在する対象〕にpratibaddhaしていないものは、〔pratibaddhaしていない〕他〔のもの、すなわち実在する対象〕を理解させない。」

14. svabhāvapratibandhaが、一方が消滅することによって他方を消滅されるような関係、すなわち ekanivṛtyānyanivṛtti という instrumental で表現される関係であるということと、pratibandha、あるいは pratibaddhatvaが、一方の存在が他方に従属し依存しているという関係であるということとは、表裏の関係になっている。すなわち、論証因の現実存在が所証に従属しているとき、所証がなくなることによって、論証因は決して存在することはできないであろう。それゆえ、論証因が存在するならば、必ず所証が存在すると理解させることができる。

15. 以上でひとまず、svabhāvapratibandhaの意味の理解については解決がついたのではないかと思う。残るのは、svabhāvaḥetuにおけるsvabhāvapratibandhaの原理であるtādātmya (tatsvabhāvatva) の解釈であるが、これはなお多くの議論を必要とするので、別の機会に譲りたい。

※ 1~9は、7月刊行予定の『インド論理学研究』第4号に「svabhāvapratibandhaの複合語解釈」として寄稿したものに基づく。